ヒューマニズム貫いたパール・バック女史　信濃毎日新聞-1973.03.10

可　第三種郵便物認

涙のあと、悲痛な記録

「東京大空襲戦災誌」を編さんして

「怨念」どっと吹き出す

——告発の主力は女性——

元勝女早乙

足かけ四年の〝歳月〟を投入した「東京大空襲戦災誌」第一、二巻がこのほど完成した。三月一日、最初の見本が印刷会社からとどいたとき、東京空襲を記録する会の若いスタッフは、みな涙もなく、本に見入ったままであった。

一冊千円をこえる本は、手にとってみると、どっしりと重い。この本のために、青春をつぎこんだ若い編集スタッフの思いはひとしおだが、その重さはまた、ぼくの胸にもしみじみとこたえるものがあった。

ふりかえってみると、四年前の七月は、とりわけ熱い夏だったような記憶がある。ぼくは、鉛筆とノートをいれたショルダーバッグを肩にかけては、毎日のように家を出た。路地裏の日かげを縫って歩きながら、ぼくの思いはかなり悲壮だった。

戦後四半世紀がすぎたこの年こそ、十万人が死んでいった〝炎の夜〟を記録する最後の一年になろう。このチャンスを逃しては、ほとんど資料らしいものもない東京大空襲の惨劇は、永遠にやみには葬られるかもしれない。ならうむられる。

それは、きわめて苦しい作業だった。語るほうも泣き、聞くほうも泣き、鉛筆はもうそれ以上進まず、翌日また同じ家をたずねることになる。一軒の家に三、四回も通ったことも、決してめずらしくはない。この炎の夜の悪夢と、炎の下で見た人間の地獄図を、どうしたらいまの人たちに伝えることができるか。ぼくは、ぼくたちに与えられた最後のチャンスを、ものにしなければならないと思った。

「東京空襲を記録する会」の構想を胸に、遺族の家を一軒ずつたずね歩いて、思いだしたくない話をうちあけてもらったのである。

ぼくたちの前にあらわれた遺族の方々は、その大半が女性であった。

戦争は、男たちの手によって起こされ、男たちの手によって遂行されたものだが、それがまもなく、ぼくたちの前にあらわれた遺族の方々は、その大半が女性であった。

戦争は、男たちの手によって起こされ、男たちの手によって遂行されたものだが、それがまもなく、ぼくたちの前にあらわれた遺族の方々は、その大半が女性であった。

評論家の松浦総三氏が、作家の有馬頼義氏が、この小さな舟のこぎ手に加わってくれて、八月五日、ぼくたちの前にあらわれた遺族の方々は、その大半が女性であった。

「東京大空襲戦災誌」は、これまでに残っていた東京空襲を、資料としてまとめたものだが、それからまもなく